

STATEMENTS 21 1 2019



行動するシンクタンク
一般財団法人 下関21世紀協会
Shimonoseki 21st Century Association

思索の人として行動し、行動の人として思索せよ
アンリ・ベルクソン (Henri Bergson) [1859 ~ 1941] フランスの哲学者

あこがれの街 下関

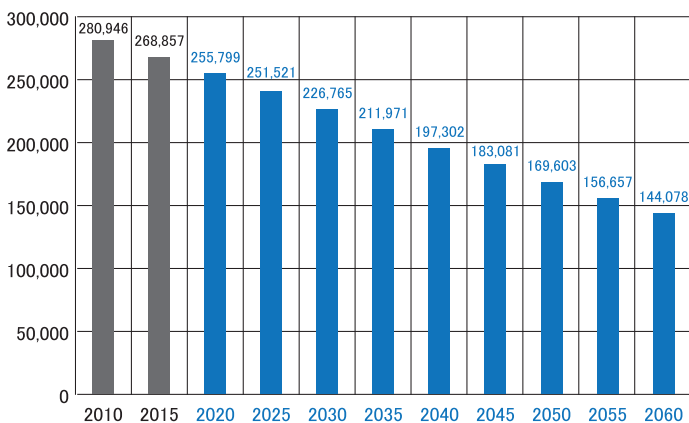
一般財団法人下関21世紀協会 会員 近藤 賢一

下関に帰郷し9月が経った。大学を卒業して暫く下関で職に就いていたが、訳あって広島、東京に転居し13年ぶりの帰郷である。昨年4月から市内で生活しているが、転出していた13年間で故郷は大きく変わっていた。

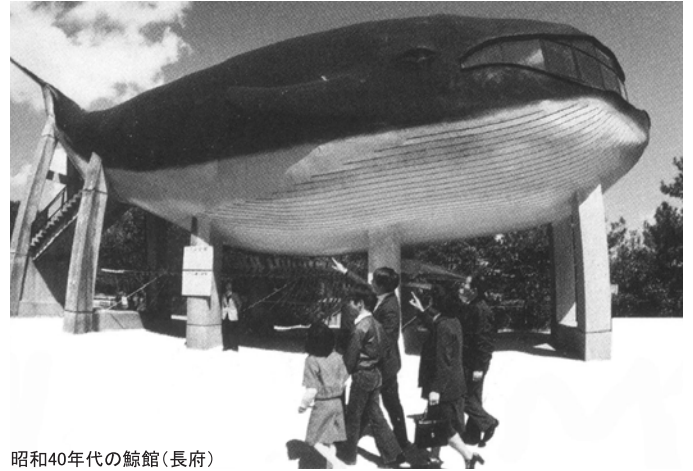
行き交う人や自動車の数が明らかに減った。以前、毎朝、中学生や高校生の子供たちが自転車に乗って通学している姿をよく見かけたが、今は、あまり見かけなくなった。道を行く人も高齢の方が杖を片手にゆっくりと歩いているイメージが強い。また、以前は、市内における自動車の運転は、いつも渋滞でイライラしていたような気がするが、今は、とてもスムーズである。これは新たに道路が整備されたためかもしれないが、それだけではないような気がする。明らかに車道を走る自動車の数が減少している。

下関市の今後の人口は、国立社会保障・人口問題研究所の「日本の地域別将来推計人口」(平成30(2018)年推計)では、2045年には、総人口が181,656人となり、平成30年12月1日現在の人口が259,481人(山口県・人口移動統計調査)であるから、今後25年間で77,825人(30.0%)の減少が予測されている。一方、山口市にあっては、平成30年12月1日現在の人口が195,638人(山口県・人口移動統計調査)、同推計によれば、2045年には178,452人となり、17,186人(8.8%)の減少にとどまっている。同じ山口県内の市であるのに、この違いは一体何だろう。本当に疑問に感じる。また、全国の人口が、平成30年12月概算値で12,642万人(総務省統計局・人口推計(平成30年12月報))、同推計では、2045年には、10,642万人であり、今後25年間で2,000万人(15.8%)減少することを踏まえても、下関の人口減少は著しい。何故だろうか。

下関市の将来の人口推計



まち・ひと・しごと創生本部事務局「将来推計用ワークシート」より



昭和40年代の鯨館(長府)

そんな折、下関21世紀協会の先輩方から、こんな話を聞いた。とある講演会でのことであるが、年配の女性が、「かつての下関は「あこがれの街」であり、多くの若者が下関に住むことにあこがれて、県内外の田舎から移住してきていた。私もその一人。」と言われていたと。また、ある先輩からは、昭和初期ごろの下関漁港は東洋一の水揚げを誇っており、下関駅周辺の横断歩道は全国で一番人口密度が高いと言われ、ファッションリーダーの街でもあったと聞いた。

「かつての下関」を知る人は、皆、口をそろえて「かつての下関」の繁栄を口にする。しかし、「かつての下関」は今やもうない。これから下関が迎えるのは、急激な人口減少と少子高齢化である。人口減少により、下関の経済市場も当然に縮小していくことも明白である。労働人口も減少し、働き手も今以上に減っていくことも然りである。行政の収入も減り、市の活力は益々失っていくものと思われる。なんとかならないものかと本当に不安を感じている。

しかし、幸いなことに、昨年6月に下関21世紀協会に入会させていただいた。当協会は、下関の活性化と発展を強く願う方々の集まりである。私と同じく下関の行く末に不安を感じ、何とかしたいと熱く想っているたくさんの先輩方に会えた。今後は、当協会を通じて、下関のまちづくりに積極的に参画し、活力と魅力あふれる下関を目指し活動していきたいと思っている。そして、「かつての下関」を知る方々に、もう一度、素晴らしい街だと思っていただける「あこがれの街 下関」を取り戻すべく努力していきたいと思っている。

最後に、本年2月3日に、下関市議会議員選挙が行われる。立候補者はそれぞれ下関市を素晴らしき街にするため、住みやすい街にするためのたくさんのマニフェストを掲げている。当然に、下関市の財政を踏まえてのビジョンや行動力があるものと思っている。是非とも、当選のあかつきには、全ての公約を実現し、人口減少に歯止めを打ってほしいものと思う。一市民の切なる願いである。